

## 使用価値の復権

年が明けた昭和六十年の三月、武田から松山に帰るのがまだ数年先になりそうだという便りがとどき、渡植はがっかりした。

大学からは経済学部ではなく、人文学部で新たな講座を担当できないかと打診があった。

高齢を心配する大学側の婉曲な退職勧奨にちがいがなかった。いさぎよく大学の意向をうけ入れ、論文の執筆で余生を暮らそうとも考えたが、高齢であることだけで職を辞するのはどうしても納得がいかない。示された講座は不案内な分野のものであったが、渡植は週一時間の授業をひきうけた。

新学期がはじまると、講義のための勉強で忙しくなった。並行して、研究もつづける。五月の誕生日で、老学者は八十六歳になった。もちろん講師陣のなかでも、とびぬけて高齢である。渡植の授業を受講した学生は十数人ほどである。かれはマイクを使わず、用意してきた講義ノートを読みあげた。

研究の方は遅滞していた。

渡植はここに来て、研究それ自体に悩むようになっていたのである。自分の学問の立場が、「用を排する」ものであることは承知している。それはそれとして価値はある。

しかし、自分の研究は哲学や経済学の世界でとっくに決着がついたことばかりではないのか。そんな不安にとりつかれる。

学会ではとっくに見向きもしなくなったことを掘り返し、老耄がゆえに斬新な理論や見解だと思いこんでいるだけではないか。

こうした疑念が頭をもたげると、老学者は失意の底に沈む。かつて恩師の左右田博士は、「学問を体系的に整えるのは、自らの思想が十分に成長してからでよい」といった。書くよりも読む方が愉しかったせいもあるが、師の訓えどおり古希をこえて、渡植は本格的に執筆をはじめたのである。

ところがここに来て、営々と書きつづけてきた論文も、年寄りの繰り言のように思えてくるのであった。あれほど熱意をこめた私家版の著書さえ、目にするのが辛くなった。

資本制商品社会の批判なら、だれにでもできる。しかし渡植は「使用価値」という概念の新たな考察をとおして、かれ独自の批判を試みているつもりでいた。

だがそのこと自体も、すでに不毛の論議として、もはやだれも関心を示さなくなっていたのである。そのような時代になお「使用価値」をふりまわすのは、耄碌したドン・キホーテではないか。

こうした悩みを抱えていたときに、渡植は内山とであったのである。

内山の著作を熟読し、同じ思想的基盤に立つ若い哲学者の登場を知り、快哉を叫んだものである。

しかしその内山が、渡植の論文や手紙に対して、まったく何の反応も示さないのはどうしたことだろうか。論文を送ったことについて、せめて儀礼的な返信があってしかるべきなのにそれすらなく、一年以上の月日が流れていたのだった。

とるに足らぬものとして、まったく無視されてしまったとしか考えられなかった。

期待が大きかっただけに、渡植は裏切られた気持ちと失意で気が重い。

学問すること自体を愉しんできた渡植も、内山からの無視は精神的に大きな痛手になっていた。

夏休みになって、渡植は内山への執着を断ちきるように課題としていたテーマへ挑戦し、思索を深めようとした。

今度は「使用価値」の対照としての「交換価値」を「経済社会学」の土俵で論じてみようとした。しかし書けばかくほど疑念がうずまき、構想は乱れ、筆は進まなかった。

あっという間に夏が過ぎ、秋が行き、昭和六十一年になった。

年始のあいさつに訪れた武田が、内山について意外な話をした。

昨年春、武田は内山とあったというのである。

内山から京都の花園大学で講演があるので、その帰りにどこかで待ちあわせをしようといってきた。そこで、新大阪の駅のプラットホームであうことになった。

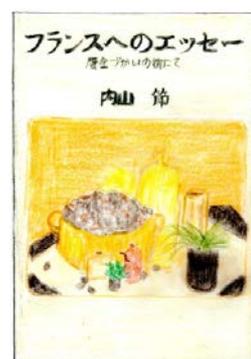
内山は目印に『フランスへのエッセー』の自著をもってベンチに座っていたが、武田にはそんな目印は必要なかった。内山をみた途端、十年来の知己のような気がした。同時に声がでて、すぐ相手に気づいた。

駅のレストランで夕食を一緒にした。

武田は饒舌で話題も豊富である。話すことはいくらでもあった。しかし十歳年下の内山が、武田の話につきあっているうちに、しだいに内山の山の生活へと話が移っていった。内山がこういった。

二十歳のときに、人の手の入っていない自然を求めて群馬の山奥に移りすみ、溪流で釣りをするのを愉しみにしていたが、山の自然もすっかり変わってしまった。その自然の変貌は、山の暮らしが崩壊して、資本制社会に取りかこまれていく過程でもある。山仕事の情景は失われ、人々は土木工事で生活の糧を稼ぐようになった。

内山は資本制社会に生きる現代人の悲しみを、山奥の寒村



においてさえも目にするようになった。内山はフランスの農村には、まだ暮らしと密着した労働があるという。

自然も人間の暮らしも変貌するが、その奥にあるのは人間の労働の世界の変貌である。内山はこのことについて、やがて一冊の本にまとめるつもりだといった。

武田は内山の話から、明治・大正時代の暮らしを知る渡植の思想は、やはり内山と相通づるものがあると思った。渡植の論文を送ってから一年が経つ。

武田は渡植の論文のことを訊いてみた。内山は箸をおき、ためらうような表情で武田をみて、短く次のように応えた。

「全部、読ませて頂きました。だから、もうしばらく、待ってください」

それで、先生のところへ内山から何かいって来ませんでしたか、と武田が渡植に訊いた。渡植は沈黙するしかなかった。

年始に武田から聞いた内山の言葉が、老学者の胸にずっとひかかったまま、冬の日がいつものように流れていた。内山へ論文を送って二年の月日がたとうとしている。「もうしばらく、待ってくれ」とは、どういうことなのか。五月がくると渡植は八十七歳になる。明日の命さえ確かでない老いた学者を待たせる内山に渡植は憤りを感じた。

その日の朝、南国にはめずらしく雪が積もっていた。

老学者は雪景色の庭をながめていた。山茶花の垣根に動くものが見える。

目白だった。朝早く、里山からおりてきたのだろう。輪切りにして竹に刺し、山茶花の根元に立てかけていた伊予柑をついばんでいる。雪のせいなのか、透きとおった光が目まぶしかった。

老学者は愛用のペンを手に、内山へ手紙を書いた。

「小生の論文が、こんなにも永い間、完璧に無視されつづけたのは生来初めての経験」と一言添えた。返信は期待してなかった。

ところがすぐに内山から分厚い封筒がとどいた。一字一句、丹念に読んでいく渡植の顔がやがてあからみ、封書をもつ手がふるえていた。渡植は手紙をわしずかみにしたまま食堂へ行った。夕食の仕度をしていた香誉子がふりかえった。

「ママ、内山がぼくを認めたよ」

渡植は椅子に腰をおとし、老妻に聞かせるように手紙を読みはじめていた。

内山はまず返信が遅れたことを率直に詫び、その理由を



このように述べていた。

「先生の論文の前提にある左右田哲学や戦前の新カント派の哲学、さらには日本における限界効用学説などが私には不案内なため、通り一遍の礼状を差し上げるだけではかえって失礼のことだと思い、先生の論文の内容に踏み込めるように勉強しておりました。しかしながら、私にはどうしても、先生が熟知しておられる明治、大正、そして戦前の教養がありません。ご好誼いただき、お教えくだされば有り難く思います」。

内山はつづいて、ここ二年間、渡植の論文集が構成する新しい思想体系について、ずっと思いをめぐらせていたと心境を告白していた。

そして渡植の理論は、学際的な研究と透徹した思索によって構築されており、哲学や経済、あるいは社会学の領域をこえた思想体系として完成されようとしている。それは何よりも、今日の資本制商品社会の矛盾を、人間の生活文化を軸に見据え、あるべき社会を再生するための視座を「使用価値の復権」におこうとしていることが新しい、といった内容の記述が連綿とつづられていた。

渡植はさっそく返事を書いた。

「私は江戸っ子である。手紙を読み、すべてのわだかまりは氷解した。私は貴方よりも五十歳ほどの年長であるが、貴方の著作を熟読し、学ぶこと多大である。貴方のことを学問の大兄と思っている。これから、親しくつきあって下されば幸いです」

明治生まれの老学者と、少壮の哲学者の交友が始まった。

三月の初旬、一橋を退官し神奈川大学へ移っていた教え子の田中正司や、渡植が神奈川大学にいたころの同僚である神川正彦らが働きかけて、再度、渡植の論文を中央の出版社から上梓しようという話がもちあがった。

田中は農文協の編集部へ「人間選書」のシリーズにいられてもらいたいと論文をもちこんだ。が、編集部は一般読書には難解なので、このままではとてもひきうけられないという。田中から事情を聞いた渡植は、内山へ手紙を書き出版をめぐる状況を率直に語って、農文協への口添えを頼んだ。

内山は快諾した。

内山の口添えで農文協は、論文集を当初一冊刊行することにし、原稿用紙で一千枚をこえる各論文のなかから本一冊分の論文の選択を渡植に要請した。老学者は閉口した。どれを選択したらよいのか、さっぱりわからないのである。さらに、本の終わりに一般読者向けの解題を執筆するように依頼があった。

老学者は困惑し、もう一度内山へ相談した。内山は渡植の仕事をひきうけ、編集部と交渉を重ねた結果、一冊の予定が三冊刊行に変更され、それぞれの本に詳しく内山が解説を書くことで決着した。

昭和六十一年十二月、最初の本『仕事が暮らしをこわす』が発行された。渡

植は「まえがき」で、「経済価値中心の経済活動が使用価値をなおざりにすることで、賃労働者を含めて、一般生活者を質的に収奪している経緯を究明することを企てた」と記し、内山は「自然と社会の矛盾を人間の存在の次元でとらえる道筋」と題する二十枚ほどの解説を書いた。

翌六十二年一月、二冊目の本『技術が労働をこわす』が出版された。本書の主題は、等価を中心課題としていると渡植は述べ、「量化された労働は価値の生産には貢献するが、健全な人間生活を支えるはずの使用価値の生産をなおざりにする。こうした生産物をあてがわれた消費者はそれだけ生活を損なわれ、その生産にあたる労働者はその労働を技能から引きはなされて、創造のたのしさを奪われやる気をなくし、文字通りの科学技術の奴婢に転落する」と書いた。内山は、「非文化としての資本制社会批判の理論」と題した解説をのせ、「私たちはいま、資本制社会がいかなる『文化的』体系をなしているのかを考察しなければならない位置に立っている。渡植彦太郎はこの私たちの問題意識の内部を照射している」と言い切った。

三冊目の『学問が民衆知をこわす』が上梓されたのは、二月である。「まえがき」で老学者は来し方をふりかえり、

「私のような学問のしかたでは、やがて落ちこぼれて、下積みになってしまうと案ずる人もあろう。すくなくとも、私は今日まであまりパットしたこともないが、どうやら、大した不平もなく過ごしてこられたのはこうした学問のしかたのお蔭とと思っている。ところが今の世の中は明けても暮れても競争一点張りの風景である。それで優勝するのも結構であるが、自分が優勝する何の保証もありはしない。競争に加わらないものは優勝はしないが、敗れて憂き目を見ることもない。優勝することだけが楽しいわけではなく、もっとささやかであっても、しみりとした楽しさがいくらかもあることを本当の学問は訓えてくれることを私は本書でせつかく語っているつもりである」

と読者へ訴えた。

内山は「今日の学問を克服する主体を見透かす」という解説の末尾で、渡植彦太郎論をつぎのようにしめくくった。

「使用価値の文化と『民衆知』の世界をみながら、経済的効用の文化と学問の否定のなかに自らの場所を築く。ここから渡植の哲学ははじまる。そしてそうであるかぎり、渡植は八十八歳にならんとしている今日も、なお現役の思想家であり哲学者であるしかないのである」

ところで内山が渡植にあったのは、これらの本が世にでる以前の昭和六十一



年五月のことである。

農文協の本の編集がほとんど終わりかけていた内山は、最終的なうちあわせが目的ではじめて松山の地を訪れた。港から電話をいれりと、タクシーで権現温泉まで来るようにと老学者はいった。ちょうど目の前に、道後温泉行きのバスが停まっていた。町の見学もかねてバスに乗り、内山は約束の時間よりも一時間おくれて温泉についた。

老学者は待ちくたびれたのか、ベンチに腰をおとして眠っているようだった。いまかいまかと、温泉前の広場を行き来するうちに疲れはて、ついうとうとはじめたところよと傍らの夫人が笑った。

本のうちあわせはすぐに終わった。

渡植は会寧焼の古陶を内山にみせた。

小壺が二口、それに茶わんが一组み。昔は、ゆったりとしたときが流れていたからねと老学者がいう。内山は手に納まりのいい壺をしばらくながめていた。

座敷をとおる風が、みかんの花のかおりを運んでくる。

「お礼に、その壺を差しあげます」

渡植はうれしそうにいった。

この日から、内山はできるだけ松山の渡植を訪ねるようにした。九州や四国方面に講演や取材で行く機会があると、少し無理をしてでも松山に足をのぼす。二人の間には多くの手紙が交換されていたが、やはり直接にあって意見を交わすことが何よりも愉しかったのである。

昭和六十二年三月、渡植は松山大学を退職し、大正末期から戦前、戦後にいたる六十三年間の教師生活を終えた。

五月には米寿を迎えた。

研究意欲はいっこうに衰えない。

つねに新たな課題に挑戦しつづける老学者の姿は、周囲の人々に人間がもつ可能性について希望を与えていた。

渡植は自らの課題をふりかえり、「経済価値」から「創造の根源としての労働」、そして肉体的活動と一体化した知能としての「技能知」へ、さらにそこから「使用価値の社会学」へと展開してきたことを論述し、ここにいたって「使用価値」それ自体について考察を深める必要が生じたことを「使用価値談義」と題する百枚ほどの論文にまとめた。

平成二年、渡植は卒寿を迎えたがなお現役の学者でいた。中山は活字にした恩師の論文を各地の教え子や学友へ送りつづけた。

渡植はたつぷりとある時間のなかで、使用価値について考え、文化の再生へと思いをめぐらせていた。



平成三年夏、国学院大学教授の神川正彦の手でこれまで中山が活字におこした論文がまとめられ、勁草出版から非売品として自費出版された。費用はすべて中山が負担した。

タイトルは『経済合理主義と生活文化』とし、三百部つくられたがすぐに品切れとなった。学会の研究者たちのあいだで必要な論文が何十部もコピーされ、まわし読みされた。渡植の学友で、東京大学社会科学研究所教授の馬場宏二は「学士会会報」に、この著作が第一線級の内容であり、先端的な学問として高い価値があると書いた。そして三十年前、還暦をこえた渡植から『資本論』の読み方をたずねられたときの挿話を紹介した。

夏のはじめ、通読がいいと応えた馬場は、夏休みが終わった学内で渡植から呼びとめられ、鰻をおごってもらった。いわれたとおりの方法で、資本論を読みおえたので、お礼と自分への祝いをしたいというわけである。会食のなかで、渡植はさらりと苦心談をした。

『資本論』の原文と英訳と邦訳の三冊を机上に並べ、飽きがるたびに本をかえて読みついでいったのだという。馬場は旧制育ちの学者の器量に敬服した。

「ぼくは、内山さんと同じ立場です」

平成四年四月九日、病床で眠っていた渡植彦太郎は、不意に目をさまし付き添いの紗江子にいった。

紗江子は、父の口元に耳を寄せつぎの言葉をじっと待った。が、これが老学者の最期の言葉となった。

この日、渡植は現役の学者のままその生涯を終えた。享年九十二歳であった。

内山節は翌年、その著『時間についての十二章』（岩波書店）のなかの『使用価値』とその時間」と称する一章において、渡植彦太郎との研究上の交流をつづり、「私が時間論を書こうと思ったひとつの契機は、私と渡植との関係のなかにあった」と記した。

死に臨み、渡植彦太郎は、「文化とかテレオロギィとかいうことは、単なるものの観方以上の何ものでもないのであらうか」という恩師左右田喜一郎の問いかけに、どのように応えようとしたのだろうか。

そのこたえはいま、渡植彦太郎の生き方そのものにあるように思えてならない。



左右田 喜一郎